

BSR 通信

BSR 推進室ニューズレター第 18 号

平成 27 年 9 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室
〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1
03-5394-3079 (直通)
bsr_lab@mail.tais.ac.jp

英訳大蔵経の話

仏教学部 仏教学科

特任専任講師 米澤嘉康

目次

- 1 頁：巻頭言
- 2 頁～3 頁：研究ノート
- 4 頁：BSR 図書室・今後の予定

近年、国外からさまざまな情報を受容するばかりでなく、国外に向けて日本独自の情報を発信することが求められています。思想・文化・習慣などさまざまな側面と関わっている仏教も、国内外に向けて発信していく必要があります。

そうした取り組みの一例として、私がかこ 16 年ほど関わっている、仏教伝道協会の英訳大蔵経刊行事業について簡単に紹介してみたいと思います。

ホテルに泊まると、枕元に聖書とともに『仏教聖典』という本が置いてあることをご存知でしょうか？ 本学では、入学式や卒業式の際に『仏教聖典』が記念品として配布されています。

その本を刊行・頒布しているのが、株式会社ミットヨの創業者である沼田恵範氏によって昭和 40（1965）年に設立された仏教伝道協会です。

その設立当初、印度・中国・日本の仏教の典籍が 3000 以上収録されている全 100 巻の『大正新脩大蔵経』をすべて英語に翻訳しようという壮大な構想が誕生しました。その構想を実現するため第 1 期として 139 の典籍を選び、世界中の仏教学者に英訳をお願いし、アメリカで出版するという事業がすすめられています。この第 1 期分についても完結するまでまだまだ時間がかかるというのが現状ですが、最近では、デジタル化のニーズに応えるようにもなりました。出版された書籍の PDF ファイルをダウン

ロードできるようにしたり、『大正新脩大蔵経』のウェブサイトと連携したりしています。その結果、刊行・公開された英訳典籍は、アメリカ国内のいくつかの大学において、仏教入門の授業の教科書として採用され、英訳大蔵経は着実に認知されてきています。

このように、仏教を発信していく努力は、一朝一夕で達成されるものではなく、時代のニーズに応えながら何世代にもわたって継続されるべきでしょう。

今年で 50 周年を迎える仏教伝道協会、そして、創立 90 周年を目前としている大正大学、着実な歩み一つずつ積み重ねることで、国内外にますます認知されていくと信じています。

研究ノート

多死社会における BSR

— 科研研究会報告① —

過去の BSR 通信 (vol.14、5月号) で報告いたしました。BSR 推進室は日本学術振興会・科学研究費助成金事業 (挑戦的萌芽研究) 「多死社会における仏教者の社会的責任」 (代表者: 林田康順先生) に取り組んでいます。

研究の方向性

この研究プロジェクトではこれまで 2 度の研究会が開催され、学外からの研究者も交えて研究の方向性を検討してまいりました。3 年間という期限の中で一定の成果に到達するために、(1) 仏教者の社会的責任を「生・老・病・死」でいうところの「老・病・死」に焦点をあてるということ、そして、(2) 社会 (とりわけ隣接領域) から仏教者への期待をまずあきらかにすること、という方向性のもと、研究をデザインしてゆくことになりました。そして、多死社会に直面する隣接領域の専門家を招き、当該領域における現状と仏教者の果たする役割についての見解をうかがうことになりました。

「死」の手前から、「死」の先まで

9 月 8 日、介護の現場からみる仏教者の役割を検討すべく、在宅介護・



訪問看護事業を東京都内で展開する高丸慶 (たかまる けい) 氏を招き、研究会を開催いたしました。

高丸氏が経営する株式会社「ホスピタリティ・ワン」(以下、HO) は、自宅での終末期を迎える患者さんのサポートを行うため、保険外看護、保険外介護サービスを提供する企業です。

保険型看護、介護は公的なサービスとして公平性が保たれている一方、内容に制限があり、利用者や家族の希望をすべてかなえられるものではありません。そこで、HO は保険型および保険外看護、介護をシームレスで提供することで、利用者や家族のより望むかたちでのサポートをめざすものです。HO の提供するサービスは、保険外介護のため費用負担は割高ですが、これにより利用者はオーダーメイドの介護を受けることができます。

高丸氏は、厚生労働省の人口動態統計から、今後「看取り難民」が大量発生するとの見通しを提示するとともに、終末期にあたっては、医療、介護、看取り、そして葬儀、供養までをトータルでデザインすることの重要性を指摘しています。

仏教者の出番

高丸氏は、葬儀、供養はもちろんですが、この「看取り」に関しても仏教者 (宗教者) の果たす役割は大きいと考えています。

終末期の在宅看護・介護の現場では、医療や介護の専門家が利用者からの宗教的な問いやスピリチュアルな問いに直面し、対応に苦慮するというシーンが見られるようです。高丸氏の報告からは、そういった問いに対する専門的な知識を持ち、また宗教的にも実践し



ている僧侶や宗教者と協働したいという思いが感じられました。

ただし、公的機関がそこに介入したばあい、僧侶はどのような制限を受けるのか、活動への報酬はどうなるのかといった課題も垣間見えました。もちろん、協働の実現のためには、僧侶の医療知識や対人コミュニケーションスキルの習得も欠かせないものとなるでしょう。

仏教者への課題

僧侶の養成だけでなく、看取りの現場にどうアプローチするかということも問題です。寺檀関係が希薄化した都市部では、HO のような在宅介護事業者がその仲介をし、僧侶と利用者のネットワークを構築する重要なアクターとなるかもしれません。

一方で、平生のつながりがあってこそ終末期に宗教者が求められるのだという指摘もよく耳にいたします。終末期にいる人が死をどのように迎えるか、そこに僧侶がどのようなかたちでかかわれるか。課題はまだありますが、介護現場での仏教者に対するニーズは少なくないといえそうです。

研究会では、今後も隣接領域で活躍する様々な声を聴取し、社会に期待される仏教者像の輪郭を描き出したいと考えております。次回 (10 月 27 日開催予定) は、認知症の研究・臨床に取り組んでいらっしゃる現役の医師にお話をうかがう予定です。(T)

看取り難民

「死ぬときは豊の上で…」という言葉は、「家で穏やかに息を引き取りたい」という意志のあらわれですが、今ではずいぶん難しい「望み」のようです。

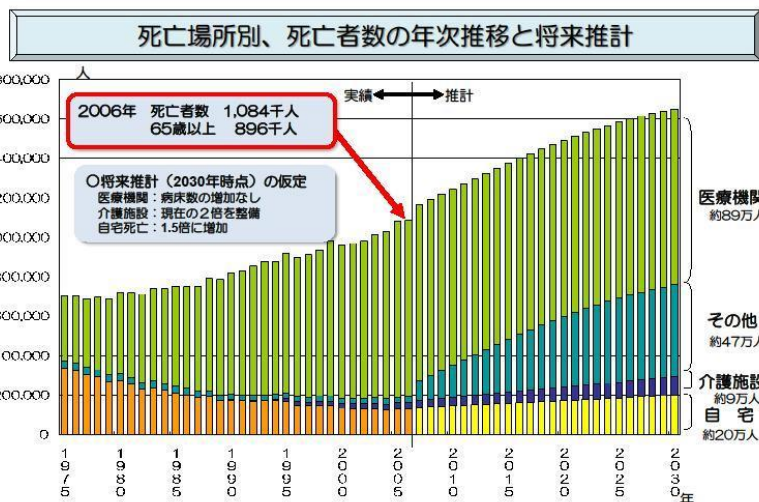
1976 年、医療機関で死亡する者の割合が自宅で死亡する者の割合と逆転して以降、多くの人にとって死を迎える場所は「家」から「病院」へと変わっていきました。その結果、現在では約 8 割の人が医療機関で最期を迎えています。

しかし、厚生労働省が作成した資料によれば、超高齢社会の進捗とはうらはらに、今後医療機関の増設は見込めず、介護施設や自宅で亡くなる人の割合が増加するという予測が示されています。

グラフには、自宅、介護施設（老健、老人ホーム）の割合が微増していく様子が推計として示されていますが、死亡者数の急激な増加に対して、どちらもすべてを吸収できる余裕はありません。

家にも病院にもそして施設にも死に場所がない人たちを「看取り難民」といい、グラフ上では「その他」（青色）として分類されています。そして、2030 年には、この「看取り難民」が 47 万人になると推計されています。厚労省が勧める在宅医療への転換は、こういった背景のもとづくものといえるでしょう。

終末期における全人的ケアを考えれば、現在、公的空間である医療機関において宗教的ケアが提供されることは極めてまれですが、私的空間である自宅では利用者が望めば十分可能となるのではないのでしょうか。今後は、このような現代社会の問題の把握し、仏教者の関与の可能性を模索することも BSR として求められていくでしょう。（T）



仏教と医療の協働例をもとめて

去る 8 月 1～2 日に BSR 研究員の高瀬・小川、および東京大学医学部で認知症を研究されている岡村毅先生とで、栃木県益子町にある真言宗豊山派普門院西明寺さんを訪問しました。

普門院の田中雅博住職は、国立がんセンターで勤務経験もあるドクターで、ご自坊の境内地に普門院診療所、老人保健施設・清看坊、通所介護施設・中善坊、グループホーム・能羅坊、居宅支援事業所・金蓮坊を開設、運営されています。まさに多死社会における BSR のひとつの実践例といえます。

多死社会・超高齢社会における仏教と医療の連携を模索する私たちとしては、ご自身にその両面をそなえ、先

駆的な事業を試みられてきた田中住職にはぜひお話をうかがいたいと思っていました。その矢先、田中住職が末期のがんを患われているという報を聞き、なんとでもうかがわなければと思い、出向いた次第です。

田中住職は私たちの趣旨を快諾してくださり、とてもそのような病状とは思えない顔色で私たちを迎えてくれました。朝は 6 時から阿字観法の指導と講話、午後には護摩供養をおこなうお元氣さに圧倒されました。

仏教と医療の関わりについて私たちが尋ねますと、生死の問題、心の痛みに回答するのは医者には無理であり、宗教者がスピリチュアルケアには絶対に必要だというお答えをいただきました。そして、スピリチュアルケアをおこなう宗

教者（病院に常駐し、特定の宗教に偏らないケアをおこなうもの）だけでなく、患者の信仰に依る宗教的ケアを菩提寺の住職がおこなう二本立てが理想的であるとお話しくださいました。

そのほかにも現場経験と深い洞察から、さまざまな示唆に富んだお話をうかがうことができ、今後の研究に資する有意義な訪問となりました。（O）



左から小川、田中住職、高瀬、岡村氏

BSR 図書室

正木 晃 著

お坊さんのための「仏教入門」

(春秋社、2013 年、1800 円+税)



本書は、葬儀離れ、墓離れ、寺離れが進んでいるといわれる中、その打開策を歴史・教義・現実の面から検討し 21 世紀の僧侶・寺院のあり方を具体的に示したものです。

第 1 章から第 3 章では、葬儀や先祖供養は必要か、お墓はあるのか、霊魂は実在するか、浄土はどこにあるのか、仏教の女性観、日本に伝わっている大乘仏教の捉え方などの問題について、お釈迦様や仏弟子の対処、仏教の変遷などを通じて、お坊さんの基本スタンスを考え、どう答えていくかのヒントを示しています。

また第 4 章「東日本大震災から見てきた仏教のありかた」では、震災時に僧侶に求められたことの第一は死者供養であったことを紹介しています。現場で求められた「鎮魂・供養・回向そして説教」を僧侶でしかできないこととして、僧

侶の原点として、忘れてはならないとしています。

続く第 5 章「僧侶の品格」では、「元気なお寺の作り方」として、僧侶と寺庭婦人について考察。僧侶の品格がお寺の公益性に直結するとし、「僧侶の品格の五条件」を上げています。

そして第 6 章では現代仏教の重要課題として「お寺の公益性」、「脳死・臓器移植」、「子育て」を上げています。これらを分析し、これらの問題に僧侶が正面から向き合うためのヒントとして提示しています。

本書の提言をたたき台として現場の僧侶が個々の問題として真摯に考え、それをまた個々の活動に生かしていかなければならないと感じました。(M)

今後の予定

9月19日(土)	11時～12時 9時～13時 13時～15時	花会式(時宗) あさ市 お坊さんカフェ「僧話花」	鴨台観音堂前 南門 けやき広場 5号館 1階
10月24日(土)	11時～12時 9時～13時 13時～15時	花会式(浄土宗) あさ市 お坊さんカフェ「僧話花」	鴨台観音堂前 南門 けやき広場 5号館 1階



※ 表紙写真：さざえ堂前 蓮の実

巻頭言執筆者 紹介

米澤 嘉康 (よねざわ よしやす)

大正大学 仏教学部 特任専任講師

中央大学 文学部卒業

大正大学大学院 文学研究科 仏教学(梵文学)専攻

修士課程修了

現在、仏教伝道協会 英訳大蔵経 編集委員

同 『仏教聖典』 編集委員

成田山仏教-研究所 研究嘱託 等を兼任。